

人間形成を目ざす書教育

五十年間の長きにわたり、試行錯誤の結果たどりついた「滋賀の書」。私達の主張を押しつけようとは考えていませんが、「滋賀の書」はなぜ生まれたのかについても順次記述し、小・中学校の教科との関連を考慮しながら、学校や塾の先生方に役立つ冊子にしたいと思います。

滋賀県書教育研究会の発足

昭和三十八年十一月、守山小学校を中心に小・中・高校および大学一丸となって第一回滋賀県書教育研究大会を開催した時のメインテーマは「人間形成を目ざす書教育」でありました。以来今年で四十五年。ほぼ郡市単位で県内を巡回しながら、今年も米原市で第四十五回大会が開催される運びとなっています。第一回大会に掲げた大テーマは今日も引き継がれ着々とその成果を挙げていることは、まことに素晴らしい事です。ります。

今日、日本の社会・教育の現状を見ますと目を覆いたくなる事件の続出ですが、四十数年前に私達が目ざしたことが当時の教育界に受け入れられていたら、ここまで落ちなかつたのではなからうかと思うのは私一人ではないと思います。

学校教育には各種の分野があります。知的なもの、思考的なもの、表現的なもの、体育的なものなど、ここ三十数年ほどの間に知的に陥り、数値の重視に教員も家庭も社会全体も目をくらませてしまったと言っても過言ではないと思います。

滋賀県書教育研究会を発足させたのも、学校教育での「書写」が技能本位になりつつあったからであります。もう教科書に頼ってはいけません。子供が育たない、書写学習までが子供に序列をつけてはいけないと確信したからです。今から四十五年前に人間形成を目指すなどと言っても理解し

て下さらない人達が多かったことは事実です。書教育では、字をうまく書くことがねらいではなく、児童生徒は書くことによって自己を見つめ、指導者は子ども一人一人の良さを引き出し伸ばすことにねらいを据えたのです。当時の年度別研究テーマを拾ってみますと、

第二年度 児童・生徒の主体性に培う書の指導

第三年度 考えて書く書の指導

第四年度 書くよろこびを得させる書の指導

第五年度 年間指導計画と指導内容の検討

この頃、役員の研究会、郡市研究会、研究公開授業、生徒作品の見方、評価のしかたなど、まさに県下あげて毎月一回は各地で研究会が実施され、助言に当る役員たちも夜を徹して論じ合ったことを思い出します。いよいよ滋賀の書教育は本物となってきました。

ぼくも書ける、わたしも書ける。

書こうとするのに適当な大きさ、太さの筆に墨をたっぷり含ませ、三年生の子どもたちには三年生の子どもの素顔が感じられる書を書かせてはどうでしょうか。

「三年生になつて筆で書かせてもらえろ」というよろこびはみんなが持っています。その第一時間目に、ああだ、こうだと注意ばかりせず、墨液を2・水1位の割り合いでうすめて、直径一・五センチ、毛丈五センチ位の兼毫筆に墨を充分含ませて、すきなひらがな一字を書いてみましょう。半紙は、たてでもよこでもよい、字によって決めましょう。一枚書いたら話し合いです。ここで大切なことは、形の巧拙ではなく、楽しかったか、こわかったか、思い切つて書けたか、書いた人の一人ひとりについて尋ね一言ずつ良いところを言つてあげてほしいのです。

私が以前に或る小学校で三年生の授業をさせていただいたのを思い出しましたので紹介します。

一、半紙を横向きにして、全部おろした筆に墨をたっぷり含ませて、「つ」を書きましょう。

大きく、元気よく書いてください。
 二、書けたら机の上にそのまま置いてください。
 三、先生も昨日書いてきました。

(次の①～⑤を黒板に貼る)
 四、みんなのすきなのはどれでしょう。

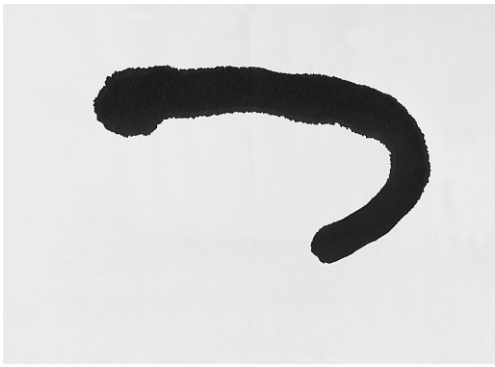
(数人指名する)

Aさんは②が良いと言いましたが、どこがよいと思いますか。など話し合う。

五、それでは、「これはどうですか」とヒゲをつけた「つ」⑥を黒板に貼って、どうです元気のよい、生き生きした魚に見えませんか。子どもは喜んで、どじょうや、うなぎやなどと、にぎやかになりました。

六、みんなの「つ」にもひげをつけてみようか。みんないっしょうけんめい。「頭が横向きや」とか「しっぽがちぎれている」など中には先生もう一枚書いてもよいか。など楽しいふんいきになりました。

七、筆はおもしろいですね。みんなたのしかったね。筆なんてむずかしくないですね。筆で書いた字は、いきいきしていることが大切なのです。これからも頑張ってくださいと言ってお別れました。



①



②



⑤



③



⑥



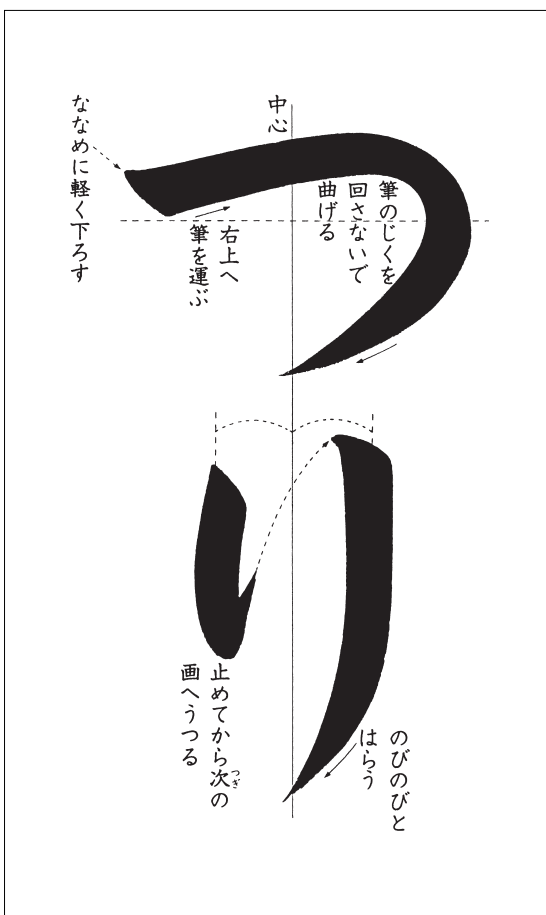
④

八、「先生また来てね。」と男の子が大きな声で言ってくれたのには、ほんとうに嬉しかった。その思いは今も忘れません。

現行「書写」教科書に思う。

左は小学校三年生の教科書21ページを縮写したものです。

ひらがなの「曲がり」や「はらい」の筆使いを
考えて書きましよう。

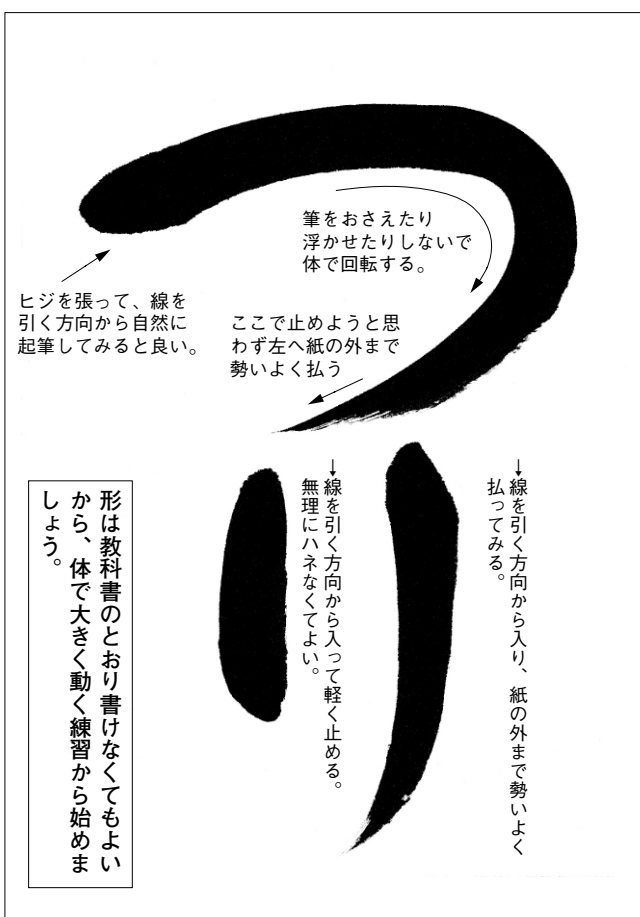


これは書道の専門の先生が、寸分のくるいもなく書いた字で、立派だとは思いますが、子どもにそっくりまねをさせるものだと思います。ここ「曲がり」と「はらい」の筆使いを考えて書きましよう。ということなのですから。

教科書は、字形の原則を教えようとしているもので、先生も書けないようなものを見せて、そのとおりやらせても書けません。

教科書のこのページを私はこうする。

技巧は後回し、自然に筆が使えるよう、ちょっと教科書の説明と違います。がやってみてください。簡単に書けるようになります。



「教えるよりも工夫させよう」

こんなことを思い出しました。三年生の子に筆使いの説明をしないで、「の」を書かせたら、途中で何回か筆を止めて筆の軸を持ち替えたり、軸を廻したりしながら「の」の形に書き上げました。その時は思いました。おとなは字を書く時に「ここはこうしなくてはならない」とか「こうしたらいけない」とか考えてしまっって結局書けないが、子どもはその子なりにいろいろと工夫してものごとを成し遂げる「ちから」を持っているのだ。基礎基本が大切だと言われるが、先ず自分で工夫させることが基本なのだと思う。みんなの前でほめることを大事にしています。教育は待つこと、子どもとの根くらべです。

しかしそのままおしまいではなく、もつとよい方法はないかと考えさせた時、先生の一言が十倍の重味を持つのです。

この場合先生の一言とは何でしょうか。それは、ひじを張って腕が水平になるくらいまで上げ、筆の毛をまつすぐにし、おさえず、ゆっくりで書くことです。座って書くより立って書いた方がやり易いです。さあやってみましょう。それ、みんなうまく「曲がり」おしまいの「はらい」もできましたね。これからもいろいろ工夫しましょう。

児童・生徒の生活の実態に応じた指導計画を

例えば、書写の学習で、四年生の一年間の学習指導計画を作成する場合には、今、目の前に居る新四年生は、一年生から三年生まで何を習い、何を身につけているかを先ず知らなくてはなりません。次に五年、六年、中学、高校へとどのような指導や体験を経ようとしているのかも見通して、四年生でやるべきことを取捨選択して、その学校の指導計画が出来るのです。勿論、学校の教科書や指導書を参考にされることは結構ですが、そこには日本中に通用することが最大限に書いていて順を追ってやって行けば必ず良い結果が出るとは限りません。書写のような表現する教科では、先生中心でなく、児童、生徒の実態に応じ興味と関心を持たせる指導が最も重要だと思います。「書の友」はこんな時にも参考になるのです。

学校や塾で書写・書道の指導は 何を目ざしてやっておられますか。

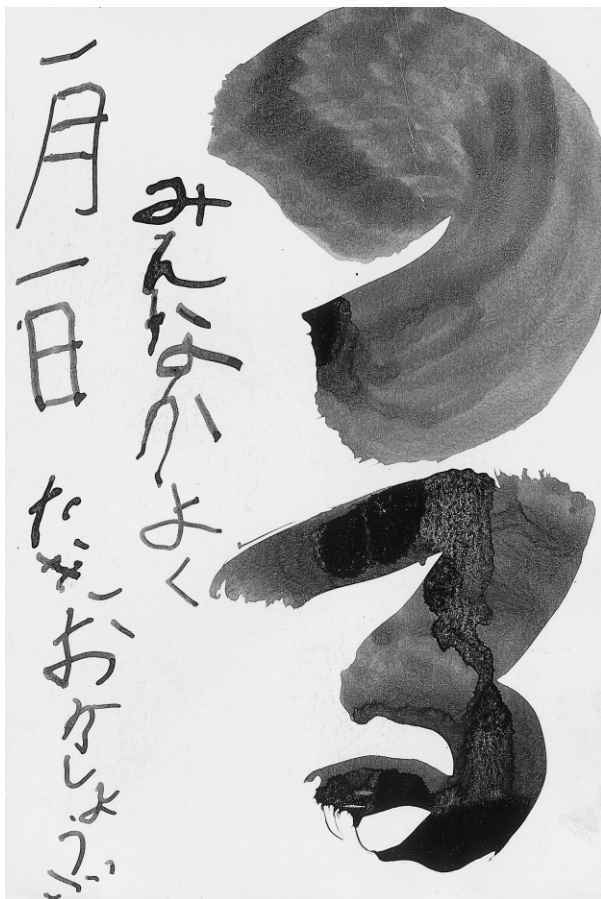
- 1、文字指導……文字の形や筆順を正しく覚え、硬筆や毛筆を使って読み易く整えて書けるようにする。
- 2、用具・用材の使い方……硬筆書や毛筆書にかかわる用具や用材の使い方や方法を広く体験して必要な時に適切な表現ができるようにする。
- 3、創造力を身につける……硬筆や毛筆を使って文字を読み易く書くこ

とのみに止まらず、個々の人間の特性や感情を盛り込んだ創造的表現を体得し、独創的で豊かな表現力を身につける。

4、先人の書に学ぶ……中国や日本古代からの文化遺産としての書を尊重し、文字の生い立ちやその変遷を学ぶことにより、自己の表現をより広く、深く、確かなものにする。

5、美しい心を養う……いろいろな書や文字に触れ、更には美術全般にも目を広げ、美しいものを鑑賞して感動することは豊かな人間生活の原動力となるものである。

以上は私なりに考えている書を学ぶ五項目です。小学校に入学した子どもが、中学校・高校・大学を経ておとなになっていく間に、いつしか身につけていくものですが、人間の心身の発達していく段階に応じて最も適当なものを適切に指導することによって、その効果は幾倍にも拡大するものと考えます。



▶小学校一年生の子の年賀状です。洋紙に淡墨で書いてみると、このように立体感が出るのです。「な」がぬけても判読できますね。

小・中学校「書写」教科書と 滋賀の書はどっちの方が

小・中学校書写の教科書は

小学校の書写の時間に教えようとしていることは、正しく整った形な
のです。いろいろな筆使いとか、墨のにじみやかすれなど全く指導内容
には入っていません。

正しく整った形を徹底的に教えようとするのなら、毛筆はいらないと
思いませんか。毛筆は柔らかい毛がたくさん集まって出来た用具で、なか
なか思うようにならない、ちょっとおさえたら曲がってしまうし、丸を
書いたらねじれるし、墨がなくなつてくるとカスレて教科書のような字
になりません。毛筆は大へん書きにくい用具ですね。

ではなぜ小学校三年生から毛筆を必修にするのでしょうか。それは毛
筆で大きく書いて、次のことがらをしっかりと覚えさせるためです。

- ①正しい筆順を覚える。
 - ②点画の長短と線と線の間のとり方を知る。
 - ③終筆のとめ、はね、はらいを覚える。
 - ④折れや曲りの書き方を覚える。
 - ⑤ひらがなのむすびの書き方を覚える。
 - ⑥線の接し方とその方向を知る。
 - ⑦へんの形を覚える。
 - ⑧文字のへんとつくりの組立て方を知る。
 - ⑨かんむりやへんのある字の組み合わせ方を知る。
 - ⑩文字の大きさや形を考えて字くばりよく書く。
 - ⑪線の太い細いなどに気をつけて書く。
- 三年生から六年生までの書写の教科書で拾ってみると以上の11項目に
まとめられると思います。この11項目中、10項までは全部硬筆で指導でき
ます。大きく書くのなら水性の太字用フェルトペンで充分です。⑪項

五年生の教科書13頁より



目めは六年生の教科書の「注書き」でやっとさがした程度ですから、教科
の内容を完全に消化するのなら毛筆は全く不用ということになります。教科
みなさんはどうにお考えになりますか。
それでも毛筆を使うには大へん重要なことがらがあるようなのです。
しかし現行の書写は国語科の一分野として「書く」という事項がかるう
じて存在する程度の位置づけなのです。特別な用具（筆・墨）を使うか
ら書写の時間を設定しようということなのです。小中学校では図工や音
楽のような位置づけがされていないのです。高校では芸術科書道となつ
ています。でも将来は小学校でも毛筆書が図工や音楽と同じように自己
の表現として認められ、芸術としての「子どもの書」が世界的になるか
もしれません。毛筆書にはその要素が完全に備わっていると私は思つて

います。その頃には「滋賀の書」が日本中に広がることでしょう。

滋賀の書とは

私たちは決して教科書を否定していません。むしろ書写教科書のねらいは完全に達成しています。教える方法が教科書と違うだけです。

書写教科書の大目標は、文字の書きかたを正しく覚え整った形の文字が国民全員に書けるようにと願っているのです。前述したとおり、私たちはこのことは、硬筆を用いて誰一人の落伍者も作らないように徹底した指導をしています。教科書も大いに活用しています。

しかし毛筆の指導は教科書と違います。従来、日本の書道（習字）教育は大人の専門家が書いた文字を手本にしてその枝葉末節のまねに終始して来た結果、殆どの子どもがうまく書けず、自分は駄目なのだと思きられてきました。そして一部の器用な人だけが育ってきたのです。

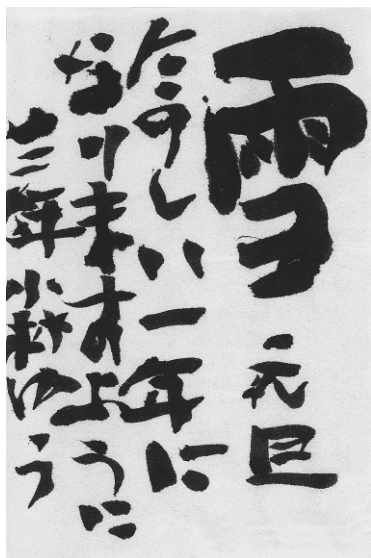
終戦（一九四五年）以後、書道に関する見方、考え方が大転換しました。実用性、画一性を強調して来た習字から芸術性、個性尊重へと一八〇度変わりました。これには外国人の人達の助言が多かったと私は聞いています。

私たちの先輩は一九四九年（昭24年）滋賀県習字教育協会を創立し、習字教育の拡充発展につとめ「書の友」の前身「習字の友」を創刊しました。一九五三年（昭28年）には滋賀県書道教育協会と改名し多くの子どもたちに毛筆で文字を書くよるこびを得させることはできないだろうかと、協会の会合や展覧会のたびに論じ合い時には有志が夜を徹して論議しました。遂に「子どもの書」を育てようという一点に結着したのです。この時一九六三年（昭38年）滋賀県書教育研究会が発足したので

以来45年間書写、書道に関する指導研究とその実践は積み重ねられて来ました。決して一部の者の好みではありません。毛筆を用いて書を書くことを通じて自己を見つめ、他を尊重し、技巧のみでなく、人間一人ひとり生きるよろこびにつなげようとして滋賀の書は生きているのです。子どもに子どもの時代が無くてはなりません。背伸びをせず着実に歩

進め、改善に改善を加えている姿が「書の友」であり滋賀の書なのです。

いずれも「書の友」より



用具・用材の特色と適切な使い方

墨(すみ)

各学年の教科書の巻頭に「毛筆の用具とその使い方」として図示され詳しく説明がしていますのでたいへん参考になると思います。(下図)

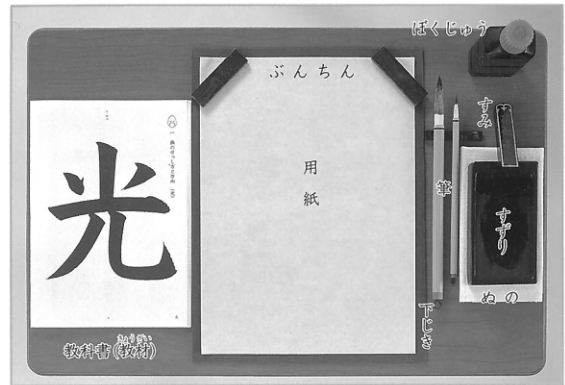
しかし、墨を沢山使う場合には硯で墨をすって置いては間に合いません。教科書にも「ぼくじゅうを使ってもよい」と書いているように、学習の効率をあげるためにも墨液を活用しましょう。

液状の墨を墨液ボクジュウ又は墨汁ボクジュウと言っています。これは機械で墨をすった状態にしたもので、原料も濃度も多種多様ですから児童に合うものを選ぶ必要があります。高校生や大人が使う上質のものが必ずしも児童に合うとは限りません。濃さもいろいろあり、容器に「このまま書ける」と書いてあっても、書く目的や紙質によって適量の水を加えて、書いてみて調整するとよいでしょう。半紙に書く場合は水で淡めて書くことよいと思います。一度水で淡めた墨液は使っていない墨液の容器にもどさないよう注意しましょう。一度水を加えると夏は四、五日で水が腐敗するおそれがあります。

なお、墨のすり方は高学年になって、細筆で小さい字を書く時に実習してください。従って三年生から硯を買わなくても、墨液用の容器(墨池)を買った方が効果的だと思います。むかしは墨を磨スることも学習の一部で、書こうとすることを考えたり、静かに墨を磨スることで心を落ち着けたりするのだと言いましたが、これも臨機応変に、指導目標に合わせてください。墨池も硯も使用後は必ずよく洗っておくことが大切です。

〈小学書写教科書 4年 P2、3より転写〉

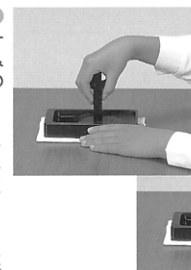
● 毛筆の用具とその使い方
● 用具の置き方



ななめに持つ

すみの持ち方

立てて持つ



すみのすり方



● ぼくじゅうを使う場合
● すずりの代わりに、ぼくちを
使ってもかまいません。

● 筆の下ろし方
● 筆のは先から少しずつ
ほくしていきます。
● 筆のは三分の二ぐらい
まで、よくほくします。



● 下ろしたところまで、
すみを小さくさせます。



● 筆(かため筆)の部分の名前

● 筆の持ち方

中ほどを持ち、立てて使います。

二本かけ

くすり指で
ささえ、小指
をそえる。

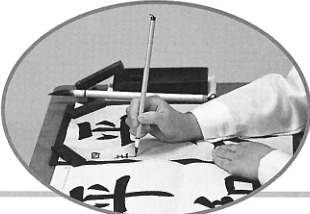
ひとさし指と中指の二本をかけます。

一本かけ

中指でささ
え、くすり指
小指をそえる。

ひとさし指だけをかけます。

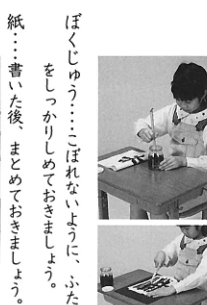
● 小筆の持ち方



● 後しまつ

すみ……よくふきとっておきましょう。
すずり……残ったすみを、きれいにふき
とっておきましょう。

筆……すみをよくふきとるか、あらって
ほ先を整えておきましょう。



紙……書いた後、まとめておきましょう。



筆について

教科書では毛の部分の $\frac{2}{3}$ までおろすと書いていますが、私は根元まで全部おろして使うことをおすすめします。

本来筆の特色は毛の弾力によっていろいろな線が書けるところにあります。のりでかためた筆でも使っているうちに根元までおろしてしまいます。書いた後に洗ったら当然全部おろしてしまいます。従って、全部おろしても書きやすい太さや毛の長さの筆を選ぶことが大切です。三、四年生で使う筆は、毛の根元の直径一・五センチ、毛の長さ五・五センチぐらいが標準です。毛の部分の短か過ぎる筆は棒で書いたような、同じ太さの線になってしまつて筆らしさが出ないと思います。五・六年になつて更に筆を買う場合は毛の根元の太さ一・三センチ、毛の長さ五・五センチ位が半紙に四〜六字書きにも適し、筆の毛の特徴を研究するにも役立つと思います。毛の硬さは中位の兼毫筆が適当です。

尚、筆は使つた後でいねいに水洗いをして吊して乾かしておきましょう。

墨の含ませ方

大きめの墨入れに必要量より多いめに墨汁を作り、かため筆の新しいものは根元までよく洗つてのりをおとしてから、墨入れの中へ入れ、根元まで充分墨を含ませます。何百本もの毛で作られている筆の一本一本の毛に墨をつける積りで何回も墨入れに入れて毛の中までたっぷり墨を含ませてから不用の分をぬぐい取ります。要は毛の中に墨を含ませておくことが大切です、表面にだけぬりつけても駄目です。よく注意しましょう。

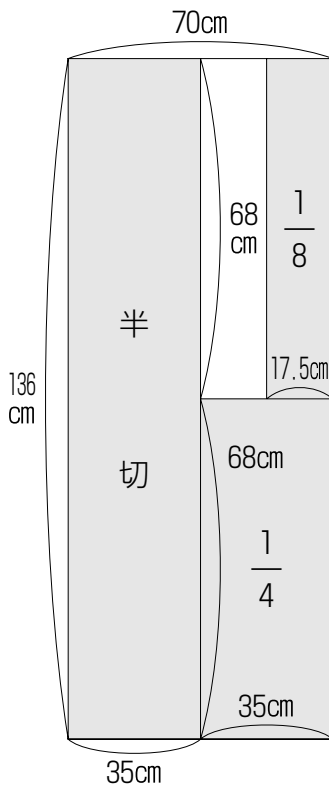
用紙について

半紙は小学生の机にちょうどなる大きさですが、質は多種多様です。全くにじまないものからよくにじむものまであり、一枚の厚さの違いや

表面のつるつるしているものや少しざらざらしているもの、純白、やや黄味がかつたものなど、それぞれに特色があるので、学習目標に合う半紙を選ぶことも事前研究の一部と考え、児童に与える前に指導者が一度書いてみるが大へん重要なことだと思ひます。

更に画仙紙を使うことも年間には何回かあると思ひますが、その質は半紙より更に複雑です。ここでは画仙紙の大きさを示しておきます。

小画仙紙全紙（136×70）と切断の名称



その他の用具

下敷き 半紙に書いた墨を満遍なく吸い込ませるために、フェルト製の下敷がぜひ必要です。

ぶんちん 書いている時に紙が動かないためにおさえるもので、右上に斜に置きます。左上は左手でおさえて書きます。

水入れ 墨を淡めるための水ですから小さいビンでも何でもよろしい。書いた作品を置くため適当な大きさに切つて用意することをおすすめしますが、せっかく書いた作品の墨がしっかり吸い込んでから置かせてください。

古新聞 書いた作品を置くため適当な大きさに切つて用意することをおすすめしますが、せっかく書いた作品の墨がしっかり吸い込んでから置かせてください。

細筆 記名のため用いるのもよろしいが、記名は太筆の墨をよくぬぐい取つて書けば充分書けますから、年賀状などを書く時以外は小学校の普段の授業では無くてもよいと思ひます。

はじめて筆を持つ子の指導

書塾なら五歳くらいから筆を持って書くこともあるでしょう。学校では三年生から書写の時間を設定して四十五分の授業として実施しますが、書きぞめなどの機会に一年生や二年生にも経験させることがあるかと思えます。

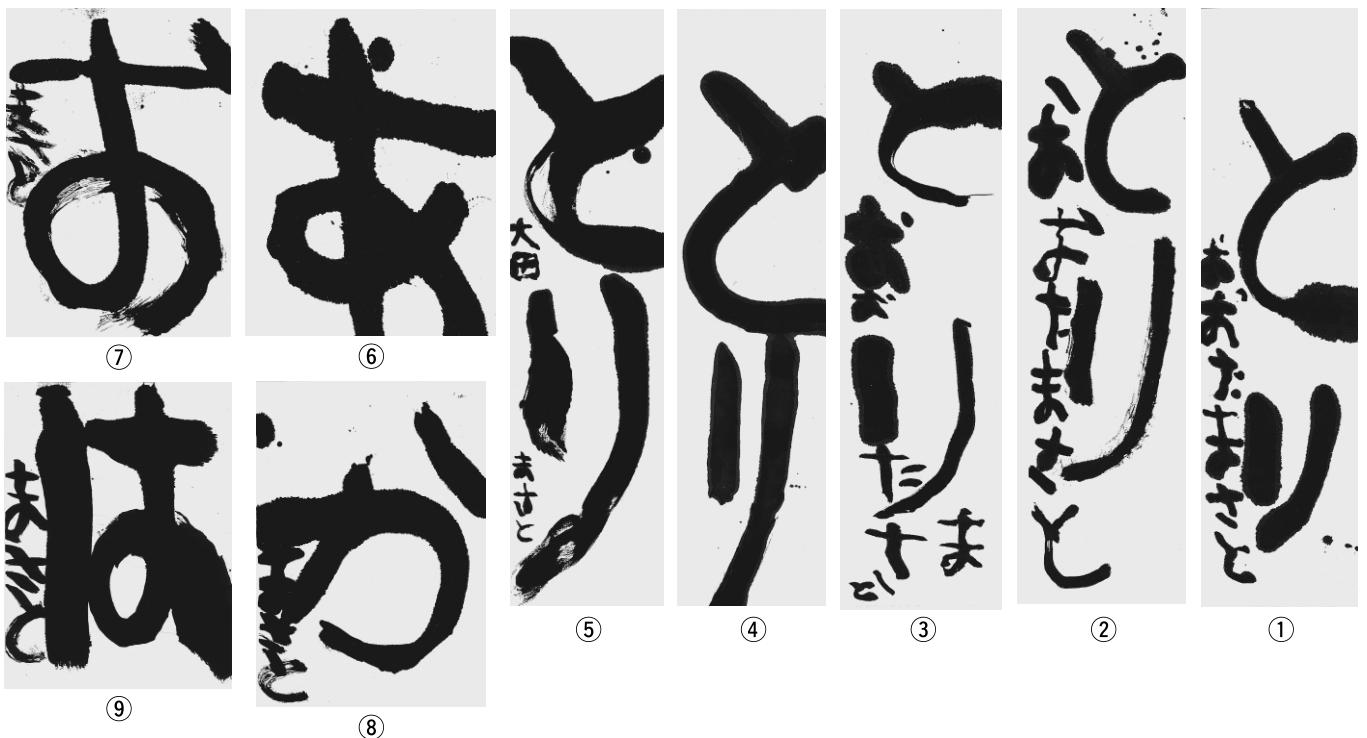
初めて筆で文字を書く子どもに対し時は非常に大切です。よく「第一印象が大切だ」とか「三つ子の魂百まで」とか言われますがここにもその言葉が当てはまると思うのです。要は、書きたい文字をすきなように書かせるのですが、それには後へつながらる何かがなくてはなりません。授業は次々と積み重ねられて子どものちからとなるのです。

六才児の書きぞめ

この頁の作品は全部、小学校へ入学する年のお正月に生まれて初めて書いた書きぞめです。

- ・ 墨入れは直径25センチ、深さ10センチのポリ容器。
- ・ 筆は直径1・7、毛丈6センチ。墨をたっぷり含ませて持たせる。
- ・ 紙は少しニジム画仙紙1/8。
- ・ 約60センチの高さの机に向かつて立って書く。
- ・ 題材は「とり」で、一枚書いて見せる。
- ・ 一回目は一字書いたら、書きやすいように私が紙を上へ引張る。
- ・ 名前は全部おろした小筆で書かせる。

写真版①は一枚目です。墨が多すぎたようです。②は三枚目、③は「り」の最後をほらつてみようと言つて書いたものです。一枚書いたらおもしろくて八枚も書きました。最初の体験ですから筆あそびのつもりで、全く勝手に書かせました。何も言わなかったら、字は小さく、線も細く、やつと形になったという程度ですが、これが子どもの共通点だと思います。③などは、あいたところ



に名前を書いて楽しんでいきます。

ひと休みしてから、もう少し大きい径1・8、毛丈10センチの筆に墨をたっぷり含ませ、前よりも更にニジム紙に、紙から出てもよいから大きく、太く元氣よく書こうと言つて、一枚書いて見せました。そして書けたのが④です。五枚目に⑤が出来ました。「よく書けたね」と言つて作品を壁面に吊してやりました。

二月に家へ来た時は、自分から書きたいと言いました。今度は少しニジム半紙に、前よりも太い径2センチ、丈10センチの筆で「あ」を書きました。前回よりも大胆に、廻すところなど筆の行く方向へ体を

ひねったり、筆を倒したり、毛が曲つても平気で書きました。ここで一言「前の時よりもよく書けるね」と言つたらもつと書くと言つていろいろなひらがなを20枚ほど書きました。何枚も書いていくうちに、驚きました。何も言っていないのに筆の軸を握つて書いているのです。それが「は」です。

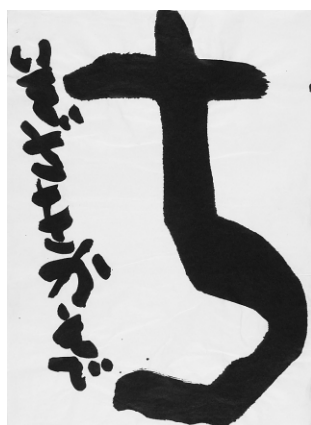
改めて思いました。決して横から、とやかく言わないで、ほめることが大切だと。そして、この純心さをいつまでも持ち続けさせたいものだと思つています。

小学校三年生の最初の指導

最初の一枚が大切

新しい筆を持った三年生。授業が始まる前から書きたい気持ちでいっぱい。墨のついていない筆の毛を手のひらに突きつけたり、指で毛をつまんだりしている。もう落ちつかないのです。

ここで形の説明など全く無用。題材を決めたら、まず書いてみましょう。一枚書いて「ホッ」としています。この一枚が大切なのです。その子のその時の様子が書けたのです。自分の作品をじっくり眺めさせましょう。次に自分の作品について思ったことを話し合ひましょう。うまく話せない子もきつと何かを感じているのですから、無理に話させなくてもよいでしょう。



話し合ったことのまとめ

- ① 墨が濃い人と薄い人の違いをみて、その違いに気付く。濃い場合は力強く、カスレも出やすい。薄い場合はよくにじみ、やわらかい感じがする。
- ② 墨の含ませ方について。墨量の多い場合はにじむが、一筆でたくさん書ける。勢いよくも書ける。少ない場合はすぐにカスレるがおさえずにゆっくり書くと思いがけない線が書ける。
- ③ 筆は根元までおろすが、筆の太さや毛のやわらかさによっていろいろな線が書けるので、決して一律にする必要はない。また、同じ筆でも書くときの力の入れ具合や墨のつけかたで作品の感じは変わる。
- ④ 半紙に対する字くばりはどうであったか。小さくかわいいもの。大きく紙からはみ出たもの。子どもの字は、最初の部分が大きくなるという共通点があり、おとなでは考えられないような形で、ちゃんとおさめる子どもならではの能力がある。
- ⑤ 名前も書いてみよう。筆の毛先を揃えて左側のあいた所をうまく使つて書こう。

失敗してもよい 思いきつて書こう

いろいろな話し合いの結果、誰にでも良いところがあることを知らせることが最も大切なことで、出来れば一時間の中に全員に接して一言ずつほめてやりたいと思います。

さあ、二枚目に挑戦しよう。話したり、友だちの作品を見たりしたので、欲張ったり、どうしようなどと迷わず、失敗してもよいから思い切って書こう。僕には僕の良さがあるのだと言うことを思わせるような指導が大切だと思います。